放浪者

霧は花園橋を境にして黄浦江の深い闇の上をさまよつてゐた。五月の夜。人通りの絶えたアスファルトの道路の上には、うすじめつた電燈のほかげが落ちてゐたが、しかし、遠くの方からひゞいてくる黄包車の轍の音は乾き切つた私の幻想の中をすべつて近づいてきた。

空は眠りはじめたばかりの街の騒音によつて濁つてゐた。深い霧をゆるがして、碼頭ちかくに繋留されてゐる汽船から、力の無い汽笛が、きれ〴〵にひゞいてきたが、しかし、うすぼやけたその響は、私の神經に挑みかゝるかはりに、私の心から決斷と反抗とを奪ひ去つた。汽笛の響が靜まるとブートンの岸にならんでゐる舢板の明りが生命に充ちた動きを示しはじめた。だが、それすらも無氣味な靜寂の中で、慌たゞしい明滅を殘して霧の中に消えていつた。

花園橋の袂までくると風が急に冷たくなり、それから、黄浦江に臨んでゐる。公共花園の石垣にあたる川波の音がすぐ足元から聞えてきた。私は欄干によりかゝつて、碼頭の方角からひゞいてくるかすかなエンヂンの音に耳を澄ました。そのとき、すぐ眼の前の川岸にそびえてゐる日本領事館の二階の窓

から、ひとすぢの光りが落ちて來た。光りは窓硝子に沁みた青いカーテンの色を霧の流れの中に漂はせた。小壺天酒樓をとびだしたのが十二時少し前であつたから、今はもう一時を過ぎてゐるであらう。私は歩きながら冷たい霧の水球を胸一ぱいに吸ひこんだ。一人の黄包車夫が私のうしろから、退屈さうな咳ばらひをつゞけながら空俥をひいてやつてきた。青黑くくすんだ彼の横顔がかすかに私の視野をかすめたが、しかし、彼は私の存在には全く注意しなかつた。街のあかりは一つ消え二つ消えて、やがてわづかに殘つてゐるアーク燈の光りだけが、厚い霧の壁の中にぼやけてゐた。私は掌の下に欄干の冷たい鐵棒をすべらせながら歩いていつた。

私は上着のポケットの中から、皺くちやになつた卷煙草をとりだして火を點けようとしたが、マッチの焰は燃えあがるとすぐに消えた。數本のマッチの棒を投げ捨てながら、私が同じことを繰返してゐるとき、ゆるやかに橋板を踏んで一つの靴音が近づいてきた。幾本目かのマッチでやつと煙草に火をうつしてから、私は、その靴音の方へ近づいていつた。その靴音は非常にたよりなく、しかし、親しみ深い調子をもつてひゞいてきたから。

一人の男が右側の欄干に背を向けて立つてゐるのであつた。彼は私の顔を見ると笑ひかけた。背が低く、その深いお釜帽の下にひしやげたやうにゆがんで見える平つぺたい顔は半白の無精髭のために掩は

れてゐたが、私はすぐに彼が私の知人であることを感じた。私と彼とは毎日のやうにB茶館の二階で會つてゐる。だゞつぴろい茶館の、うすぎたなくよごれた部屋で彼は何時も私よりも先きに、――そこは部屋の隅であつたが、暗い露地に向つてひらかれた窓のそばの、壊れかゝつた籐椅子の上にもたれかゝつて葉巻を喫つてゐた。その姿勢には一つの特徴があつた。彼は何時も右手をズボンのポケットの中に突込んだまゝ、正面の壁を見詰めてゐるので、右肩が不調和に張り上つてゐた。そして煙草を一口喫つたと思ふと慌てゝ左手の指の間にはさんで素早くテーブルの端になすりつけるやうにして火を消してしまつた。だが、しばらく經つと彼は喫ひさしの葉巻をふたゝび口にくはへた。すると彼の左指は巧みに動いてテーブルの上のマッチをすつた。短い時間のうちに同じことが幾回となく行はれた。だが、彼のうるんだ眼は決して正面の壁から離れようとしなかつた。その横顔の表情は、人生のあらゆる希望から心を遠ざけた人間を感じさせた。しかし、私がB茶館へゆくのは大抵午後であつたから、してみると、彼は眼を醒ますとすぐに此處へやつてくるのかも知れない。私は彼と會ふやうになつてからの十日近くの間、この不可思議な薄ぎたない日本人が、彼の椅子から立ちあがるのを見たことがなかつた。毎日、茶館の階段をあがつてゆくと、煙草の煙にくもつた部屋の中に、まん中のテーブルをかこんでゐる支那人たちの頭を通り越して、同じ姿勢を保つて肩をそびやかしてゐる彼の姿が見えるのであつた。そして、私はこの男と一度も口をきいたことが無いにもかゝはらず、私たちは、もう親しい關係を通り越してし

まつたやうな氣がするのであつた。何故かといつて、彼の姿は一日ごとに私の空想の中にうきあがり、そして、すべての私の思念が彼の顔に結びついてしまつてゐたのだから。

「散歩ですか？」

彼が低い聲で言つた。だが、それは私の幻覺であるのかも知れなかつた。何故かといつて私はその安らかな閑かな聲を前に幾度びとなく聞いたことがあるやうな氣がしたからである。しかし、かういふ調子で話し合ふことは當然であつた。そこで私は彼とならんで欄干にもたれかゝつた。

「あなたは何時もこんなにおそくまで歩いてゐるんですか？」

私は自分の聲が異常な親しさのために顫へてくるのを感じた。しかし、彼の顔には全く私の期待に反して猜疑をふくんだ表情がうかんできた。――だが、それは私に對する敵意であるよりも、むしろ、自分の心にかくされた親愛をまるで突拍子もなく相手の言葉の中に見出したときの驚きに似たものであつた。

「いや、――ときどき。しかし、あなたはどうして私を御存じですか？」

彼の聲には何か非常に愉快さうな調子があつた。

「B茶館でお目にかゝつてゐます。」

「B茶館で、――いや、そのことぢやあない。私には、何かあなたが私の生活とつながりを持つてゐる

人ぢやないかといふ氣がするんですか……」

彼はかう言つてから、寒さうに首をすくめながら、

「たとへばですね。今夜、この橋の上で會つたといふことに奇異な感じを持ちませんか。——こんな晩に、同じ國語で話し合ふことのできる人間が。いや、こんなふうに話してはいけないかな。しかし、何かかう似通つたものを探り合つてゐるものがわれ〳〵を一つの偶然によつて結びつけたといふやうな氣持が——」

彼の聲は、かすかな熱情に咬しかけられてゐるものゝやうに若やいだ調子を帶びてきた。しかし、その表情に示された非常に複雜な變化は、この男の心が何時どんな兇暴な發作に襲はれるかも知れないことを感じさせた。私は不安になつた。彼は無恰好な靴の踵で小刻みに橋板を蹴りながら暫く默つてゐたが、急に私の方をふりむいた。

「あなたは私が何を求めてゐるかといふことを御存じですか？」

その聲は私の胸板にひゞいた。私は眼に見えない危險が私の心に迫つてくるのを感じたのである。一瞬間、——上着のポケットの中に膠着してゐるやうに動かなかつた彼の右手が急に動きはじめた。

彼の右手には何時の間にか小型のピストルが握りしめられてゐた。その銃口を素早く私の眼の上へ差

しつけたので、私はほとんど衝動的に二三歩うしろへ退いた。若しそのとき彼の落ちついた笑ひ聲が聞えなかつたら、私はそのまゝ倒れてしまつたかも知れない。だが、彼は慌てゝ銃口を下に向けた。そして、自分の發作的な行爲が相手の心臟に及ぼした影響をたしかめるやうに窪んだ瞳を輝やかせながら。

「いや、冗談です。全く冗談です。私は强盜ぢやない。あなたはをかしな幻覺に襲はれて居られるんぢやないですか。大丈夫です。私はとき〴〵こんなことがしたくなるんですからね。このピストルは四年前私の友人が私に預けていつたものですが、——しかし、その男は强盜でした。それも後になつてわかつたのですが、——」

彼はふたゝび欄干に背をもたせかけながら、ぼそ〳〵とした聲で話し出した。だが、何の感興も彼を驅り立てゝはゐなかつた。それは私に對して話しかけてゐるといふよりも、むしろ何か非常に退屈なひとりごとを言つてゐるやうに見えた。空はしつとりと澄んで、街は深い眠りに落ちてゐる。橋の下につないである小さい民船の舷に川波のくだける音が、ひそかな大氣の底にひろがつていつた。

「——私はその男と、とき〴〵四馬路の酒場で會ふ以外には、その男の素性も知らないし、勿論、名前も知らなかつたのです。一度だけ夜おそくなつて、私の借りてゐる部屋に泊つていつたことがあるだけですが、——その時も、朝、私が眼を醒ましたときには、彼はもうゐませんでした。冬の寒い晩でした。それも、もう夜明けがたですが、私の部屋の窓の硝子を烈しく敲く音が聞えてきたのです。窓の外の暗

い露地の中には、その男が、びしよ濡れになつて、眞つ蒼な顔をして立つてゐました。——すまないが、これを預つてくれ、さう言つて私の手にわたしたのがこのピストルです。そのまゝその男は物も言はないで走つていつてしまひました。數日經つてから私は邦字新聞の記事で、彼が强盜であつたことを始めて知つたのです。」

「その人は、それからどうなつたのです？」

「新聞では蘇州あたりに潜んでゐるといふやうなことが出てゐましたが、その後どうなつたか知りません。——それよりも、どうです。このピストルを見詰めてゐると銃口がひとりでに私の心に挑みかゝつてくるやうな氣がするぢやありませんか。私は何度こいつを額にぴつたりとあてゝ引金をひかうとしたか知れません。いや、ほとんど毎晩、私はそれをやつてゐるんですがね。四年間、私は一つの彈丸をはめこんだまゝ、このピストルをポケットに入れて歩いてゐるのです。だから、——このピストルは私にとつては魂以上のものです。さういふことがおわかりになりますか。道を歩いてゐるときでも、私は誰かとばつたり會ふと、もう右の手がむづ〳〵と動きはじめるのです——」

彼の聲は沈んできた。私は彼の唇がしきりに顫へるのを見た。その表情は、思ひがけなくも一つのおそろしい衝動が彼の心を打ちのめしてしまつたやうでもあり、また不意に彼の頭を襲ひかゝつた複雜な感情をどうして言ひ表はさうかと苦しんでゐるやうでもあつた。だが、しかし、この男の運命を穿鑿

する必要はない。——（私の頭に一つの新しい思念が稲妻のやうに閃めいた）——何故かといつて、彼の存在は私にとつては、もはや回想の中にうかびあがるべき珍奇な人間の幻像以外の何ものでもなくなつてしまつたのだから。

そこで、私はこの不幸な放浪者とわかれるために欄干を離れた。

「私は明日の朝の船で日本へ歸らなければならないのです。當分これでおわかれです。しかし、近いうちに、またすぐやつて來るつもりです。」

「いや、どうも、通りすがりにとんだことをお話しました。今夜は私もへんに寂しくなつて、をかしなことばかり話しました。私のやうに長い間の孤獨に馴れついてしまつてゐると、ときゞ、こんな風に調子が外れてくるのです。今夜のやうにしやべつたことは全く久しぶりです。私のやうに放浪して歩いてゐる人間にとつては孤獨に馴れることよりほかに自分を生かす道が無いのですからね。數年前には私も誰とでも親しくなれたのですが、今はもう駄目です。それでは、——左樣なら。」

「左樣なら！」

私は何か未だ彼と話をつゞけたい衝動を感じたが、彼はくるりと向きを變へると、虹口通りの方角へ足早に歩いていつた。彼のうしろ姿は幽靈のやうに霧の中に吸ひとられた。私は遠ざかつてゆく彼の靴音に耳を澄ましてゐたが、しかし、一人きりになつたことが私の胸に、ある落ち着きを與へ、私の心は、

たつた今通り過ぎた一つの情景を、過去の出來事として、自分の放浪生活への空想の中に探りはじめた。私は公共花園の方角へ歩いていつた。だが、私の足が橋の袂から、花園の入口に通ずる石段に觸れようとしたとき、深い霧の膜をやぶつて一發の銃聲がひゞいてきた。

しかし大地はすぐに氷ついたやうに靜まり返つた。私は未知の不可思議に向つて突進してゆく自分を感じながら、翼のやうに兩手をひろげて公共花園の入口に通ずる空想の階段をおりていつた。

ある心の斷片

私はその夜、何かしら頭の底に妙な疲れを感じてゐた十一時過ぎまで銀座裏のカフエーを飲みあるき、浮ついた空氣の中で、絶えず自分を不自然に咬しかけてゐたので、一人になると急に心の殼だけが歩いてゐるやうな氣になつた。

こんなとき、若し誰か知つてゐる男とすれちがつたら、きつと自分は逃げだすにちがひないと思つた。通りすがる人の顏が、空虛になりきつた私の心の中へ侵入してくるやうな氣がして何とも知れず恐ろしい觸れがたいものを感じさせるのだ。

新橋驛の前までくると、ふと、夕刊賣りが煉瓦塀に貼りのこしていつた、大きい紙きれが眼についた。大逆事件、不逞鮮人朴烈の陰謀發覺と二行にわけて太い字で書いてある。朴烈——その文字が私の頭の中へすべりこんだ。

その名前を私はたしかに知つてゐる。あの男だ。あの男にちがひない。私はふと、ポケットの中に日暮れがた買つたばかりの夕刊が讀まないまゝで入れてあるのを思ひだし、慌てゝ待合室の電燈の下でひ

ろげて見た。

私の心は急に一つの姿勢をつくつて社會面に出てゐる朴烈の寫眞と向ひ合つた。印刷が悪いので輪郭がぼやけてゐるが、その顏にはたしかに見覺えがある。

五六年前、私は雜司ヶ谷に住んでゐたある友人の家で、ちやうどそこへ朝鮮人蔘を賣りにきた彼と會つたのだ。彼は質朴な、ぼきぼきした物憂さうな調子で話してゐた。

「あなたは朝鮮の獨立運動に關係して居られるのですか？」

友人の小說家がさう言つて訊くと、彼の唇には冷たい嘲笑がうかんだ。

「まさか――あんなものはどうだつていゝんです。」

かう言つてから彼は傍に坐つてゐる私の方をちらりと見た。その眼には、自分が見くびられてゐるのではないかといふことを警戒しおそれてゐるやうな感じが現はれてゐた。私はむづ痒いやうな反感を抑へることができなかつた。彼の昂然とした面持ちの中に浮ついたテロリズムに醉つてゐる心が私の頭に反射してきたのだ。さういふ感傷に溺れてゐる朝鮮の革命青年の一人の男に私は長い間、輕侮の感情を持つてゐたから。

しかし、私の反感はすぐに消えた。痩せこけた彼の横顏を見てゐると、何か一つの强烈な感情がしつとりと落ちついた輪郭の上を流れてゐた。

彼の膝の上に置いた風呂敷包の結び目をほどき、中から朝鮮人蔘の入つてゐる四角い箱をとり出した。

「それは一つ幾らですか？」

友人がさう言つて訊くと、彼はちよつときまりわるさうに顏を俯せて、

「一圓です。――ほかの店でお買ひになるよりは少し高いかも知れませんが。」

と言つた。その和いだ聲はこの男の心の隅にかくされてゐる正しい感情を象徵してゐた。そして、この男に對するかすかな親しみが湧いてきた。

彼と會つたのはそれだけである。しかし寫眞版に現はれた彼の顏を見詰めてゐると、一瞬間、私の頭を充した回想の中の彼の印象がすつかり薄らいで、近づきがたい兇暴な顏になつた。

數段に分たれた記事を讀みつゞけてゆくうちに私の心は段々昂奮してきた。私は自分の心が遠のいてゐたある悲壯なものを喚び戻したやうな氣がした。

私の頭には、この新聞記事を前にして、同じやうな昂奮を感じ合つてゐる幾つかの人の顏がうかんだ。すると、不意に心の底から別の感情が呼びかけた。

「何故、これが悲壯であるのか？」

その聲が私の昂奮を貫いた。私はどきつとしてもう一度朴烈の寫眞の上に視線を落した。何とも言ひ

やうのない卑しいものを私は自分の心に感じたのだ。

獄室の中で傲然と寢そべつてゐる彼の姿が私の頭をかすめた。その姿は無氣味な英雄的な昂奮に醉つてゐる人間を感じさせる。だがそれはどうしたといふのだ。私は上海にゐた頃、日本のある大官を射擊したために領事館警察の留置場につながれてゐた二人の朝鮮人を、ちやうどそこへ記事をとりにいつたある邦字新聞の記者に連れられて遠くから見たことがあつた。遠くから見るとその留置場は大きな檻のやうな氣がした。一人の男は廣い留置場の隅にうづくまつて寢てゐたがもう一人の男はワイシャツ一枚になつて、大きな聲で歌を唄ひながら室の中を散歩してゐた。そのとき、私にはその二人の男が檻の中に入つた何か珍奇な動物であるやうな氣がしてならなかつた。——

私と一緒に行つた新聞記者は留置場の中を映え立てゝ歩いてゐた脊の高い男の方に向つて帽子をとつて敬禮した。すると、向うの男も慌てゝお辭儀をしかへした。すると、若い新聞記者は何か素晴らしい悲壯なものゝ前に立つたときの昂奮に彩られた。この一場の光景は私の心を別の新しい感激に導いた。私にはこの二人の男の心に張りつめてゐるよろこびが強い力で迫つてくるやうな氣がしてきたのだ。それは彼等が長い間匿くし持つてゐた一つの目的を成し遂げたといふことだけではなく、彼等が一つの行爲を終へた瞬間に無限に自らを英雄にする空想の基礎を築きあげたといふことであつた。

私たちが歸らうとしたとき、今まで薄暗い留置場の隅にうづくまるやうに眠つてゐた他の一人の男が

むくむくと起きあがつた。彼は黑い支那服を着てゐたので、まるで熊のやうであつた。兇行の現場を逃れて、郵船碼頭の附近をピストルを亂射しながら走つたのがこの男である。この男が大きな欠伸をしたとき、ふと私は、プートン通ひの舢板を待つために碼頭の一端に立つてゐた一人の英國婦人が彼の放つたピストルのために射殺されたこともおもひだした。この女はもう五十を越した不思議な運命を持つてゐる老人であつた。といふのは、彼は一昨年、その夫である老人に死にわかれ、それから急に思ひ立つて二十年前に行方不明になつた一人の子供を探すために世界中を歩いてゐるのであつた

さういふ嘘のやうな話が、この女の泊つてゐた小さい支那旅館の主人によつて語られた記事を私は新聞で讀んだのだ。しかし、この老婦人の死は、そのとき私の心に何の感動も惹き起さなかつた。何故なら、ピストルを亂射しながら群集の中を夢中になつて走つてゆく一人の革命青年の姿があまりに強く私の心を壓へつけてしまつてゐたから。

この男にとつてもおそらくこの老婦人の存在は石ころにもひとしかつたであらう。今、留置場の中で悠々と欠伸をしてゐる彼の頭に一度でもこの哀れた老婦人の姿が、自分の擊つた彈丸に仆れた哀れな老婦人の姿が映つたであらうか。

私は急にこの「英雄」を入れた留置場の前に立つてゐることが苦しくなり、慌てゝ面をそむけて領事館警察の裏木戸の方へ歩いていつた。

朴烈の寫眞を見ながら私はそのときの情景を思ひうかべたのだ。そして、この男の前に私は少しも自分を卑屈にする必要はない。私はさう思つた。寫眞の中の彼の顏の中からは段々私が最初に彼に會つたときの和いだ表情がうかび私の頭に閃えつゞけてゐる彼の魂が翳を落した。そして無理にもヒロイックな姿勢をとらなければ居られない人間の心がしつとりと私の胸に觸れてきた。

私は夕刊を折りたゝんでポケットに入れ、少年の驛員が一人眠さうに立つてゐる改札口の前に立つた。

傳說

(1) 村の蹄鐵屋

山にかこまれた小さい湯治場の村。

冬になると、遠い麓の百姓たちが、日あたりのいい街道を、米の袋を背負つてのぼつてくる。

腰のきかなくなつた老人たちをのせてきたガタ馬車の馬夫は、客のゐない床屋の店先きに坐りこんで、眼つかちの親爺と一時間ばかり猥談をやる。鼻をたらした子供が馬のぐるりにあつまつて、わいわい騷ぎながら、長い小便を珍らしさうに眺めてゐる。

日が暮れて、骨組だけの雜木が、ざわざわと唸りだすと、村はづれにある蹄鐵屋の店が明るくなつてくる。

この蹄鐵屋から話がはじまる。

兄と妹の二人暮し。兄は二十五、妹は十六。それで、村では「鍛冶屋の娘」の評判が高い。

兄は蹄鐵をうち、妹は針仕事だ。

蹄鐵屋の「あんちやん」は村第一の物識りで、だから東京から毎日手紙が來る。新聞がくる。若い衆たちは、毎晩「あんちやん」の說敎を聽きにくる。二十五にもなつて夜あそびも知らなければ女も知らない男が變り者であることは何もこの村にかぎつたことではない。それも美しい妹を持つてゐる蹄鐵屋の「あんちやん」だ。

「おい、今夜も說敎を聽きにゆくべいか。」

と、白いヘコ帶を尻の上に結んでゐる神代杉の下駄のやうな男が朋輩の肩を敲く。桃を盜みにゆくには先づ桃畑の番人の機嫌をとるにかぎる。

それで「あんちやん」は評判がいい。

ある晩。川ぞひの溫泉宿の二階へ東京から官員さんがやつてきた。髭の生えた男はみんな官員さんだ。その官員さんを「あんちやん」が訪問する。これは、村では特種のニュースだ。夜、おそくまで「あんちやん」はその男と話しこんで歸つてきた。

「あんちやん、何かいい話があつた？」

妹は兄の顏が何時もとちがつてゐるのを見逃さなかつた。兄は興奮してゐた。彼は、懷の中から一册のノートをとりだし、それを枕元にひろげながら丹念によみはじめた。

「あんちやん、寢ろよ、まだ起きとるのか？」

「うん、あんちやんはね、とても、すばらしいことを考へとるんだよ。」

カンテラのうすあかりの下で兄と妹が顏を見合せた。

「いいかい、あんちやんはこれから一つの發明にとりかかるんだからね、うまくできたらお前にいい着物をうんとこさ買つてやるよ。」

「どんなこと？」

「そんなことがめつたに話せるか、お前もあんちやんが何をしてゐるか誰にも言ふんぢやねえぞ、――若し發明が盜まれてみろ、それつきりぢやねえか。」

妹はすやすやと眠つてしまつた。頁をはぐる兄の手首は顫へてゐた。

あくる朝。

兄は自轉車にのつて、麓の町へ出かけた。そこの藥屋からしこたま藥を買ひこんできた。さういふ日がつづいた。夜なべ仕事が多くなり、馬夫はなかなか蹄鐵をうつてもらへなくなつた。仕事場が裏の納屋に變つてしまつた。

仕事はなくなつても平氣だつた。妹は兄の臺口の中に十圓紙幣が四五枚入つてゐるのを見たから。

「いいか、――誰が來ても決しておれを呼ぶんぢやねえぞ。」

店はガラあきだつた。それで「あんちやん」は說敎をやめてしまつた。「あんちやん」は氣狂ひになつ

たといふ評判が立つた。

背廣服を着て、鳥打帽子をかぶつた男が、がらんどうの店先きへあらはれた。その男は毎日やつてくる。その男は妹を相手に兄のことをほめたてる。夜、――妹が谷間ひの共同風呂から歸つてくると街道の上り口の石段のそばにその男が待つてゐた。二人は川ぞひの道にそつてあるきだした。杉の密林の間から宿屋の二階のあかりが見える。落葉のにほひが足の下からぷうんとくる。それから、溪流の音だ。かすれたやうな河鹿の鳴き聲だ。その男が妹を抱きあげた。そこで、妹は兩肩を顫はせながら眼を瞑ぢた。

わかれ際に妹がささやいた。

「あんちやんが今にえらい發明をするからね、それから夫婦にならう。」

「ほう、――何の發明。」

「何だか知らねえが、毎晩、裏の納屋ん中でやつてゐるだよ。」

その男はもう一度妹を抱きあげた。

一ト月の後、村の人たちは裏山の雜木林の方からおそろしい爆音を聞いた。明け方だ。それは毎日のやうに聞き馴れた獵銃の響きよりもずつと大きかつた。妹が眼を醒ますと、そばに眠つてゐる筈の兄がゐなかつた。裏の窓をあけると、うすい靄が立てこめてゐた。そして坂道を走つてくる兄の姿が見え

る。妹は安心して眠つてしまつた。その朝、兄は、はればれとした顏をして仕事場に坐つて「ふいご」を鳴らしてゐた。久しぶりで、彼の眼の前には蹄鐵が眞つ赤になつて燃えついてゐた。

「あんちやんの仕事も、もう一息といふところまで來たぞ。」

「知つてる、あんちやん！　今朝、大きな音がしたのを。」

「誰か鐵砲をうつたんづら。」

「鐵砲の音とはちがつとつたよ。」

「ほいぢや、大砲、か――あんちやんには聞えなかつたよ、おれの頭は發明で一ぱいになつとるからな。」

兄は聲を立てて笑つた。それからヤケに蹄鐵をうちつづけた。

その時、鳥打帽子をかぶつた男がめかしこんでやつてきた。妹は慌てて障子のかげにかくれた。兄はどきつとした。その男の眼からひやりとくる法律のにほひをかぎあてたのだ。だが、もうおそかつた。その男は懷の中から細長い名刺をとりだした。細長い名刺を見たら誰だつてひやりとするだらう。兄は着物を着かへることも許されなかつた。その男は兄をつれて出かけていつた。町へゆく街道筋に村の人たちがさわいでゐた。その男は妹の方を振向きもしなかつた。霜どけの道に死人のやうに蒼ざめた兄の顏がよろめいてゆく。

「早く歩け。」

と、その男が言つた。

ガタ馬車が新しい客を運んでのぼつてきた。

（2）監獄の中の現實

深見東馬はC刑務所（その頃は監獄と呼ばれてゐた）の中で事件の顚末を聞いた。話したのは若い典獄だつた。若い典獄の中にはときどき、かういふ物わかりのいい男がゐる。

だが、その前に、何故、彼がC監獄にゐるかといふことを説明して置かう。それはこの物語にとつて可成り重要なことになるかも知れないから。――（彼等の同志である山野小助が出獄してきた。その歡迎演說會がひらかれた。餘興として一心亭辰雄の浪花節が終つた頃、會場の一隅が騷ぎ出し、赤い旗が會衆に配られた。見る間に示威行列が花道を練りあるく。臨場の警官が止めようとすると行列は明かに反抗の氣勢を示した。格鬪がはじまつた。そして數人の犧牲者がつかまつた。これは當今の法律では「兇徒聚集」といふ罪名にあてはまるさうである。だが、そんなことは如何でもいい。深見東馬はその罪名で二年間やられた。そして、彼はもう一年半の刑期を終へてきたところだ。後年、ある男がこの事件を說明して、××の極端な鎭壓策に對する××黨員の反抗運動であると言つた。別の男の說によれば、一心亭辰雄の當夜の出し物が異常なセンセイションの動機になつたといふのであるが、それもどつちでもいい。讀者は唯、かういふ事件があつたといふことだけ記憶してゐて下さればよろしい。）

さて、典獄の部屋で、深見東馬はすつかり話しこんでゐる。

「――だからさ、運がよかつたぜ、君なぞも此處にゐたばつかりに命びろひをしたやうなものさ、全く、今度の入獄だけはお禮を言つたつて足りないね。」

「しかし、どうも僕にはわかりませんね。アケシナ（明科）の山で爆彈の試驗をしたその男は知つてゐますがね、しかし、その男をたづねて、製法を教へたといふ立川といふ人物は何者です。その立川に何故、北野がさういふことを頼んだかといふことになると、僕にはまるで見當がつかないんだが――」

「そんなことまで、僕たちにわかりつこないよ、今に公判があるからはつきりするだらう、何しろ、こいつは空前の大事件だからね、今までにあげられた連中の中で二十四人だけは先づ死刑は免れないといふ話だ、これは僕がT監獄にゐる友人からこつそり聞いたことだがね。」

「ぢやあ、石塚は？」

「無論やられたよ。」

「時澤は？」

「無論さ。」

「もう一つ教へてもらひたいんだが、その中に柳マユミといふ女はゐなかつたかしら？」

「ゐたよ、――そいつは君、北野の情婦だらう、T監獄の病監にゐるさうだが、とても強情なやつだといふ話だ。何だか、君なぞと萬更の仲ぢやなささうだね、だが、今度だけは女一人にや代へられないからね、政府の意嚮では一人殘らず草の根を分けても探す方針らしいね、だが、親玉の北野は評判がいいぜ、つかまつたときに、一將功成らずして萬骨枯ると言つて笑つたさうだが……」

監獄のそとでは事件が刻々にひろがつてゐる。いや、監獄のそとよりも、深見東馬の頭の中で。

空想の構圖は音を立てて崩れた。そして、彼の頭の中で、毎日のやうに日向ぼつこをしてゐた柳マユミの姿は跡方もなく消えてしまつた。そしてもう彼には感情の波動を測定する力がなくなつた。彼の心の中では愛慾の舞臺が幕をとぢた。彼は一つの感情を乘り越えて進んでゆく力を感じた。彼は女の愛を信じてゐたから。(これは仕方のないことだ。若しさうでなかつたら彼は發狂してしまつたであらう。)

彼の頭の中を、小さな人間の感情を蹂躙して、歴史が急速に進行する。それ故、彼は「殘された人間」を感ずるよりも前に殘された使命を感じた。

だが、ときどき頭の底に水の流れるやうな音の聞えることがある。そして、女の顔が見える。胸が、腕が、――血にまみれてきれぎれになつた肉片が彼の眼の前を泳ぎだす。彼の顔は一日ごとに血の氣を失つてきた。胸の底はうす寒く内臓は鉛のやうに氷ついてしまつた。蒼白い空の下にぼんやりかすんで

見える死刑臺。その上で北野の顔が笑つてゐる。ギイギイと槽の鳴るやうな音が聞える。……」

彼は監房の中をのたうち廻つた。

――あの女は殺されるだらう。そして、おれは生きてゐるのだ――

彼の感情のバネはゆるんでしまつた。監房ではすぐ日が暮れる。そして、すぐ朝になる。

典獄の部屋。物わかりのいい典獄と彼との對話。

「どうしたんだい、君、――まるで飯を喰べないさうぢやないか。」

「おれは。」

と、彼は蚊の鳴くやうな聲で言つた。

――「胃袋がなくなつてしまつたんだ！」

「妙なことを言ふね、――やつぱり飯だけは喰べた方がいいぜ、さう言へば君、いよいよ公判が終つたらしい、傍聽は禁止になつてゐるし、新聞記事も禁止になつてゐるからまるで内容はわからないが、やつぱり容易ならん事件らしいね、――大體、死刑になるらしい模樣だ。昨日は、そとにゐる連中を代表して、長坂だけが面會を許されたさうだ。」

「そ、それで。」

「――それだけの話しか聞かないがね、いざとなると覺悟してゐただけにみんなしつかりしてゐたさう

だ。何しろ、二十四人ずらりとならぶんだからT監獄も大抵ぢやないよ、だが、君、まつたく妙な考へは起さない方がいいぜ、此處で興奮したつて仕方がないからね、何しろ命びろひをしただけは確だからね、出たら謀反氣を起さないで地道に稼ぐんだね、同じことをやつてゐれば何れは命がないにきまつてゐるさ——、それに、もうかういふ仕事の根は今度の檢擧で絶えてしまひさうだね。」

その夜。

そとからくる月の光が監房の壁にしみついてゐた。不意に妙なすがすがしさが彼の胸に來た。雪のつもつた高原である。あるいてゐる人間は一人もゐなかつた。その上にたよりなくゆれてゐる彼の影が、——彼はもうマユミのことを考へなかつた。

(3) スパイの心理

公判の終つた日、T監獄の獨房の中で、死刑囚、立川小彌太の獨白。

——到頭、此處まで來てしまつた。かうなつてみるとおれも少しづつ薄氣味わるくなつてきた。だが兎に角うまくいつたものだ。まさか、政府もおれをこのまますぐに出すといふわけにもゆくまい。どう見積つても一萬圓はたしかだ。この金とくらべたら二三年の懲役位屁のやうな話だ。だが、あの典獄の部屋で、同志の一人として長坂に會つたときはおれも思はず涙が出てしまつた。少し寢覺めのわるい氣

もするが、いや、——この位のことでヘコたれてゐちや仕方がない。しかし、おれのおかげで、北野は歴史上の英雄になつてしまつたのだ。出獄したら、おれは人知れず、この記錄を書き殘して置かう。おれもまさかこんな役目が廻つて來ようとは夢にも思はなかつた。おれが北野から祕密をうちあけられた日に野崎のところへ若し相談にゆかなかつたらこんなことになるんぢやなかつた。あそこで齒車が喰ひちがつてしまつたのだ。おれは、あのときの野崎の顏を今でもはつきり憶えてゐる。——あいつはかう言つた。こいつは君すばらしい儲け口ぢやないか、おれは早速、杉坂のところへ行つて一芝居打つてくる。それでなくてさへ杉坂は××黨を全滅させようとしてゐるんだ。五萬圓、いや、十萬圓はたしかだ。だが、おれをどうするのだ、おれを、——と言つたらあいつがかう言つた、こんな芝居が打てないで何ができる、萬事はおれに任して置け、——君は××黨員としてをさまつてゐればいいのだ、そして、兎に角事件をどたん場まで持つてゆく。證據が大きいだけ××の方には都合がいいしおれたちの方だつて都合がいい、そして、君の密告ではなくて、萬事ばれる原因が向うの方にあつたことにさせるのだ。これよりいい方法はない。さうでなかつたら、こんな事件は何處かできつとわかるものだ、——おれはこれを君のために言ふのだ、とあいつはさう言つた。今から考へてみると、おれはその言葉があいつの口から出るのを待つてゐたやうな氣がする。生命が惜しい氣持、卑怯者になりたくない氣持とが、おれの心の底でからみあつてゐた。それからのおれは物に憑かれたやうに動きだした。おれはあいつたちの仲

間のうちにゐる間は心からあいつたちと同じ氣持で一つのことに感激した。そして、杉坂を訪ねるときは、國家のために大芝居を打つてゐる志士のやうな氣持になりすましてゐた。おれは杉坂の手から金をうけとるごとにそれを飯一文だつて自分のために費つたことはないぞ。さうだ、おれの手から金が渡らなかつたら北野はまるで手も足も出なかつたらう。おれは忠實な××黨員として一貫した。誰ひとりおれの心事を疑ふ者はあるまい。若し北野一人だつたら事件を此處まで運ぶこともできないにきまつてゐる。おれには唯、事件の行きどまりがわかつてゐたといふだけだ。兎に角、うまくいつた。新聞はおれの豪快な態度を賞め讃へるだらう。だが、杉坂は一體何時までおれをかうやつておくつもりなのか。おれは妙に不安を感じてきた。おれだけが助かるとしたら誰か疑ひを抱くやつが出てくるかも知れない。だが、そのときは言ひぬけはいくらでもある。おれが要路の大官と親しいといふことは誰でも知つてゐる、日本の××史上におれの功績をみとめてゐる人間は、おれが杉坂と親交のあつたことを疑ふまい。あの男だけは友人關係のために罪を減ぜられたのだ、といふ理由を信じさせることは容易いことだ。——だが、今夜は妙にへんだ。氣がゆるんでしまつたせゐか、あいつたちの眼がうらめしさうにおれの顏を見詰めてゐるやうな氣がする。さう言へば、おれは、あの鑄鐵屋の若者が公判廷で泣いてゐた顏をおもひだす、あの溫泉宿の二階であの男はおれの手を握りしめて契つた。たとひ口を八つ裂きにされても、——と、さう言つたときの、あの男の顏を今でもおぼえてゐる。あいつだけは可哀想でならぬ。あいつ

は、この事件のばれた原因がすつかり、自分にあると信じきつてゐるのだ。あのとき、おれの手が裏から廻つてゐたとも知らずに、あいつは今でも、おれの顏さへ見ると、涙をぽろぽろこぼしてゐる。今頃はきつと氣を失つて泣いてゐるだらう。あの男には、妹が一人あつた筈だ、出獄したら、おれはきつと妹の幸福を保證してやらう。そのことを今、あの男に傳へることのできないのが殘念だ。おれには何だか事件の終るのが早すぎたやうな氣もする。もう少し、ゆつくりしてゐてもよかつたやうな氣すもする。今度、世の中へ出たら、さうだ、今度こそ、罪ほろぼしのために、おれは××黨のために一肌ぬぐぞ！」

（4）杉坂と野崎との會話

「——ところで、立川ですがね、何とかして、あいつだけ助ける工夫は無いでせうか？」

「そのことについては、いろいろ考へてゐるんだが、何しろ藥が少し利きすぎてしまつたのだ。今、あいつだけを助けたといふことになると妙な結果になりはしまいか。」

「せめて、十年か十五年の……」

「いや、それもあるが、今となると、まるで手の施しやうもなくなつてゐる、それに助かつたといふことになると、立川も生きてはゆかれまい、長い間、そのことでは考へぬいたが、もう仕方がない。涙を

ふるつて……」

「わかりました、實は、わたしもさう考へてはゐました。やはり、閣下の明斷に服します。あいつを若し生かしておいたら、どんな祕密が洩れるかも知れません、あの男にしたつて、むしろ××黨員として身を滅す方が光榮かも知れないのです、――期せずして終りを全ふしたわけですからね。」

（5）辯護士控室の輿論

A「今朝、到頭やつたらしいね。」

B「そんな話だ、――北野は立派だつたさうぢやないか、柳マユミといふ女もなかなかしつかりしてゐたさうだ。唯、立川小彌太だけが泣きわめいて困つたといふ話だが。」

C「さういふものだよ、平常、豪宕をもつて任じてゐる人物の方が、ああいふ場所では弱いらしいね、あの人なんか最も毅然としてゐていい筈だが。」

A「おれはこんなことになる理由はない、杉坂を呼べ！　つてしきりに呶鳴つてゐたさうだが、何だか妙なことばかり口走るので、到頭おさへつけて刑を執行したさうだ。」

B「――一ぺんに頭が狂ひだしたんだ、だが、さうも言ひたくなるかも知れないよ、杉坂だつて昔の同志なんだからね、法廷では實に痛烈な態度で檢事をやつつけてゐたものだがな、――惜しいことをし

たと思ふよ、北野一味の中で國家的名士はあの人位のものだからね。」

（6）蒔かれた種

深見東馬は出獄した。

朝、――門の前には彼の友人である信近が待つてゐた。信近はすりきれた袷一枚きりに板草履をはいてゐる。曇つた空の下を鐵道馬車の停留場へ向ふ坂道を二人の影がゆれてゐた。

監獄のそとには街がひろがつてゐた。

空の下に馬車の軌道が光り、忙しさうに人が通つた。店はやうやく戸をあけたばかりだつた。磨きたてた洋品店のショウウインドウに着ざめた二人の顏が映つた。

「知つてゐるかい？」

と、信近が言つた。

「何をさ――」

「あのひとのことを。」

「あのひとつて――？」

「君の、あのひとさ。」

「――マユミがやられたといふことだね、その感情は、もう疾つくに監獄の中で卒業してしまつたよ。」

「ぢやあ。」

と、信近が言つた。――「何も彼も話して置かう、君が入獄するとすぐに、北野とのあの間の關係は急速に進んだのだ、これはどうにも仕方のないことだつたらしい。」

深見東馬は、慌てて視線をそらした。涙がにじんできたのだ。ぼうつとかすみかけた視野の中に、彼の前の線路を、牛乳の車が横切つていつた。

「あのひとも、君に對する感情では、ずゐぶん苦しんでゐたらしい、それが進んで死刑を望むやうな氣持にさせたのだと思ふ、今、こんな話をするのもへんだが……」

深見東馬の感情は急速な角度をもつてぐるりと一廻轉した。それから、すぐに立ち直つた。もう少しで土俵を割るところだつたが彼の腰のねばりは、すつかり強くなつてゐた。

「いや、僕はさう思はない、あの女は死刑臺にのぼる氣持に積極的な光榮を感じたのだ。若し、さうでなかつたら、あの女は、――いや、僕は。」

と、冷笑をうかべながら言つた。――「監獄の中で頭を壁にぶつつけて死んでゐたかも知れないよ、だが、もうそんなことはどうだつていいさ。それよりも、ほかの話をしてくれないか、石塚のお母さんや、時澤の姉さんは――」

「誰も彼も滿足なやつが一人だつてゐる筈はないよ、君は石塚のお母さんが、古着を背負つてあるいてゐることを知るまい、あのひとの顏は相好がすつかり變つてしまつた、あのひとは僕たちにもお母さんのやうな氣がしてゐたが、――石塚がやられてから、しばらく寢ついてゐた。今は昔の知り合ひをたよつて、ほつつきあるいてゐるんだ、――誰ひとり相手にする者はないよ。」

「何故？」

「だつて、誰だつて同じことさ、相手にするにも出來ないぢやないか、時澤の姉さんは、未だプロステイチュートにはなつてゐないと言つた方が早いだらう。あのひとは女學校も中途でよしてしまつたり、――それに、まるで嫁入口がないんだ。」

「だつて、あのひと、――何と言つたけな、倭文代さんか、あのひとはなかなか評判の美人だつたぢやないか。」

「評判の美人だつて何だつて、××黨の姉さんは××部落だつて御免蒙るよ、――今は君、さういふ時代になつてしまつてゐるんだぜ、だからさ、だから僕は、北野先生のヒロイズムを輕蔑するのだ、これがみんなあの人のヒロイズムの結果なのだからね、さうして、世間の奴等は何と言つてゐるか、北野はえらかつた、生き殘つてゐる奴等は屑だつて――」

「そんなことはどうだつていいさ、ところで、君の奧さんの病氣はどうかね、ずゐぶん苦しんで居られ

たやうだが。」

「ああ。」と言つてから、信近はそつぽを向いてしまつた。

「死んだよ。」

彼は寒さうに肩を突つ張つた。——「だが、病氣のせゐぢやないよ。」

「ぢやあ、何だい？」

「その前に、おれは君に話しておきたいことがあるよ、——君にきくがね、これからどうしてやつてゆくつもりだい？」

「どうしてつて——どうにかして生活するだらう、そして、やつぱり運動をつづけてゆくよりほかに仕方がないね。」

「それができると思ふかい？」

「できてもできなくても、おれにはそれよりほかに生きる道がないのだ。」

「そりやあ、結構だ、だが、おれにはもうそんな情熱はなくなつてしまつた、——何かやるとしたところで二人や三人で何ができる、もうすつかり雜草まで刈りとられてしまつたのだ、殘つてゐるのは、おれのやうなぺんぺん草だけだ、——」

「だが、土のあるかぎり根は殘つてゐるよ。」

「ところが、その土が何べん掘りかへされたか知れないのだ、未だ芽を出してゐない球根まで探し出された、何處へ行つたつて、まるで不毛の地さ、おれはつくづくあきらめたよ、妙ことを言ふと思はないでくれよ、おれは痩せるだけ痩せぬいて死んでいつた女房にミルク一杯買つてやることができなかつたことを今どんなに後悔してゐるか、——北野先生が死刑になつた朝、あいつは死んでしまつたのだ。もう少し話さう、君には僕の氣持がわかるかね、長坂さんだけが接見を許された日だ、おれは、典獄のところへかけつけて、時澤にだけせめて一目會はせてくれと言つて頼みこんだのだ、そしたら、今日はおそいから駄目だ、責任をもつて會はせるから明日來たまへ、と言ふのだ、家へ歸る道で、おれは次の日が日曜だつたことに氣がついた、これは弱つたぞと思つた、典獄も多分うつかりさう言つてしまつたのだらうが、もう一度念を抑してくればよかつたとつくづく思つた、その次の日の朝だ、——あいつが、何だか胸騷ぎがする、今日だけは家にゐてくれと言ふのだ、そして、しきりにミルクがほしいと言ふのだ、そのとき、君、おれの懷の中にはやつと電車に乘るだけの金しかなかつた、それで、待つてゐろ今、ミルクを買つてきてやるからと言つてとび出したのだが、そのまま、T監獄へ來て、無理矢理に典獄に面會すると、典獄が眞つ蒼な顏をして出てきた、——惡いことをしました、折角ですが今朝、命令が下つて、もう始まつてゐるのです、今が四人目で、時澤さんの番ですといふのだ、おれはそのまま躁土の上にへたばつてしまつたよ、おれは大聲を出して泣いたよ、こんな氣持は監獄の中にゐた君にはわ

かるまい、おれはそれから、このことを長坂に通じようと思つて夢中になつて駈け出した、遠い道を、やつと長坂の家へ曲る坂道の角までくると細君に會つた。その顏を見ると、おれは胸がこみあげてきた

――長坂さんはゐますか、といふと、今、差入れの金をつくりに出かけたところだといふのだ、駄目です、もう、とおれはそのまま地べたに泣き俯してしまつた、そして細君の前で首をはねる眞似をして見せてやつた、それから家へとんで歸つたのだ、歸つてみると、君――あいつはもうくたばつてゐたよ、それからおれは長い間考へた、おれは今でも、時澤に會ひに行つたことを後悔してゐるのだ、あいつにミルクを一杯買つてやることの方が、どんなにおれにとつて大事なことだつたか知れないといふことがわかつたよ、ぺんぺん草はやつぱり屋根に生えてゐればいいんだ、だがら、おれはもう、ふつつりとあきらめた、おれは乞食にはなつても二度と××黨員にはなるまいよ。」

「しつかりしろよ、君は如何かしてゐるぞ、おれたちは××をしなければならんのだ、おれたちは殘された使命を果さねばならんのだ、――君の氣持だつてわからんことはないさ、だが、そんな悲劇を幾つも幾つも乘り越えて進むのだ、この不毛の地におれたちは雜草の種になつてまぎれこむのだ、さうしたら、時が經つと芽が出てくるだらう、そのほかにおれたちの生きる道はないのだ。」そこは町の四つ角だつた。群集が雜沓してゐた。

「いや、おれの心には、さういふ注射がもうまるで利かなくなつてゐるんだ、君は君でやるがいいよ、

おれは此處でわかれよう、あの群集の中へまぎれこんで姿を失つてしまふのだ。」

信近は寂しさうに笑つてみせた。それからふと思ひだしたやうに立ちどまつた、――「忘れてゐた、君のところへ來た手紙をあづかつてゐたよ、横山玄澤から來たのだ？」

玄澤は死刑囚の中で、一ぱん瓢逸な坊さんだつた。彼はあるきながら封を切つた。太い筆ですらすらと書きつけてある。

――御きげんよく、君の健在を祈る、同行十二人、明日はすらりと××をならべて討死するのだ、いや、おつと待つた、柳マユミだけは××を持つてゐない、――」玄澤の皮肉な笑顏が不意に彼の頭の中にあらはれた。そして、それからすぐに蒼ざめてだらりと寢そべつたマユミの裸身が、――

彼は手紙をずたずたにひき裂いて、手でまるめてから泥溝の中へなげ捨てた。

「ありがたう、――ぢやあ此處で別れよう、兎に角、おれはやつてみるよ。」

彼はくるりと向きを變へた。それから口笛を鳴らしながらあるきだした。

逃げられた男

この村には閑雅な情趣があふれてゐる。何處を歩いても野心の破片一つ落ちてゐない、それぞれの境遇と運命に安んじた人間の顔がどの家からものぞいてゐる。寺の和尚が地酒に醉つて、いゝ氣持になつて唄をうたふと、郵便局の局長さんが、谷間ひの溫泉宿まで提灯をつけて碁をうちに出かける。月のいい晩はこつそり裏口から宿をぬけだし、坂をのぼり、つり橋をゆすぶりながらわたつてゆくと足の下で河鹿が鳴く。

若い會社員の佐野庸吉は川ぞひの溫泉宿に彼の細君といつしよに泊つてゐるのだが、ありていに言へば、彼はあまり幸福ではない。何故かといつて、彼よりも一週間ほど前に一人で先きにやつてきた彼の細君は同じ宿に泊つてゐる若い土木技師と何時の間にか親しくなつてゐる。これは教養のある細君から言はせれば、退屈まぎれの火あそびに過ぎないのだが、しかし何時火がつくか、火がつくか、と、はらはらしながら待つてゐるのは彼自身にちがひないのだから。——

しかし、此處に着いてから三日目の朝、佐野庸吉は一人の男に會つた。その男は宿の庭つゞきになつてゐる川の中の岩のふちにしやがんで短い釣竿でうぐひを釣つてゐた。そこで、庸吉とこの男が親しく話をするやうになつたといふことについては特殊な動機を探す必要もない。先づ彼等は、かういふときには誰でもがさうであるやうに、お互の好意を示し合ふために、默つて笑顔で挨拶した。ところが、その次の朝、庸吉は同じ場所でその男と會つた。すると、その三日目の朝、わが佐野庸吉が、この男と背中合せになつて、ときどき冗談口をきゝながら同じやうに釣絲を垂れてゐるのを見たものがあるとしたところで、この平凡な事件の推移について疑を挾む者はあるまい、庸吉はこの男が小說を書くことを商賣にしてゐるといふことをのぞいては、何のために山の中の溫泉宿に來てゐるかといふことについてはまるで知らない、たとへば、肺病の保養に來たとか、中風の療治に來たとか、さもなければ、自分のやうに上半期のボーナスをそつくり湯治の費用にあてゝ、女房の火あそび道具に使はれるために來たとかいつたやうなことについて。

庸吉が東京にゐる間、彼の妻から毎日のやうに手紙が來た。山の溫泉宿がすつかり氣に入つたこと、空氣がいゝこと、そして彼女が毎晩彼のことを考へながら眠ること、最後には「わたし久しぶりで銀杏返しに結つてもらひましたの、そしたら小さな娘さんになりました。自分でも見惚れるほどなの、だから、是非いらしやつて下さい。」と書いてあつた。

そこで、庸吉はその晩、友人の賢者にたのんで診斷書をつくつてもらひ一週間の靜養休暇をもらつてやつてきたのである。庸吉は無精に妻が戀しくなつた。これは仕方のないことだ。彼等は未だ結婚してから一年に充たないのであるが、よし、さうでないからとしても、庸吉のやうな種類の男にとつては妻に對する感情は永久に古くならないものだ、彼は小さなバスケットの中に妻から送つてくれと頼まれた洗顔クリームと、化粧石鹸と、それから妻の好きなチョコレートの罐と、自分が汽車の中で讀むための「柳生十兵衞旅日記」とを詰めてやつてきたのである。少し色の褪めた紺サージの洋服と冬の中折れでは見すぼらしいと思つたが、新しい帽子を買ふよりも停車場から買ひ切りの自動車で宿の玄關に乘りつけることの方がどんなに彼の妻を滿足させるかしれないといふことについて考へなければならなかつた。宿屋へ着くと妻は妙にそはそはしてゐた。しかし、庸吉は見違へるほど健康さうになつて、ぽうつと上氣した彼女の顏を美しいと思つた。だが、彼は妻の部屋に入つたとき新聞紙の屑や、果物の皮が雜然として投げ散らかされてゐる部屋の中に、バットの箱が二つ三つ拋り出されてあることを見逃さなかつた。

……「二三日前からね、土木の工事で來てゐる男の方がね、トランプをやりにくるのよ。その人もあなたに會ひたがつてゐたのよ。」

そこで、哀れな佐野庸吉は胸にこみあげてくる燃えるやうな苛立たしさを抑へつけた。しかし、結局さういふ苛立たしさも妻に對する彼の新しい感情を、唆るより以上の何ものでもなかつた。何故かといつて、その土木技師、――つまり彼の妻の說明によれば、非常に深い教養があつて、その上、藝術に對する趣味においても彼の妻と一致してゐるところの土木技師と友人になつたといふ妻の喜びに對して彼が妻を責める理由はなかつた。

その男は毎晩のやうにあそびに來た。困つたことには庸吉にはどうしてもその男が好きになれない。第一、髮を綺麗にわけて金ぶち眼鏡をかけた色の淺黑いほつそりした男とならんでゐると彼はだんだん妻とその男とが一組の夫婦で自分だけがよそから來た人間のやうな氣まづさを感じてくる。それに妻と土木技師の話は全く彼には興味がない。彼はつくねんと壁にもたれて頭の中でしきりに宿賃の勘定をはじめるのだが、今月の家賃と、それから洋服代が拂つてないことを考へると、どうしていゝかわからなくなる。しかし、さういふ氣まづい時間も、彼の妻が土木技師の部屋へ出かけて自分だけがひとりのこされた時間のみじめさとくらべると物の數ではない、――仕方がない、酒でも飲まうか、と庸吉は思ふのだが、しかし、彼は何時の間にか、頭の中で空になつた德利の數を數へて、それから、そつと胸の中の算盤を彈いてみる。……

ある晩、その佐野庸吉が、川ぶちで知合ひになつた小說家と二人で、ほろ醉ひきげんになつてうかれるやうに山間ひの道を通りぬけ、街道筋の町並の方へ歩いていつたのである。人間にはかういふことが

あるものだ。この人がどうして、こんなに醉つぱらつて歩いてゐるのかといふやうなことを詮索する必要はない。だが、しかし、無理にも小説の構想に順序を要求する讀者があるならば、假りにかういふことにして置かう。つまり、何時ものやうにひとりぼつちの氣まづさを沁々と味つてゐた佐野庸吉が、到頭一人で酒を飲みはじめた。醉ひが全身に廻つてくると、彼は今まで鬱結してゐた氣持を洗ひざらひ誰かに話したくなつた。かういふときに、佐野庸吉が、毎朝同じ岩の上で釣絲を垂れてゐる若い小説家をおもひだすのが當然である。そこで彼は小説家の部屋に出かけた。……と、かういふわけだ。すると、全く行詰つてゐた小説家の空想のいとぐちが佐野庸吉の出現によつて堰を切られた溪水のやうに溢れだした。二人で新しく飲みはじめたことはいふまでもない。

それから先きは街道筋を歩いてゐる一人の醉つぱらひの影法師について語る方が早い。もう、もつれ合ふやうに肩を組んで、小説家がしやべり出した。

「……そこでだね。おれは今晩こそ、いよいよ書けるぞ。君は女房に逃げられるのを惧れてゐるし、小説の中のおれはどうして女房から逃げようかとあせつてゐるのだ。君の運命と僕の運命とは背中合せになつてゐるやうなものだ。ちやうど、僕のうしろで何時の間にか君が魚を釣つてゐるやうにね。何しろ、そんなことをくよくよするなよ。君はこれから、おれの小説の中で『逃げられた男』の役割を演ずるのだ。さあ握手しよう！」

「ひどいね――『逃げられた男』とはひどいね、私は唯、醉つたまぎれにうつかり自分の内密話をしてしまつたゞけで、……そんなことを小説の材料にされちやあ、たまりませんね。それだけはかんべんして下さい！」

「いや、そんなことはどうでもいゝ。おれはかうやつて歩いてゐるうちにもひとりでに小説が進行してゐるといふことを考へるね。乘りかゝつた船だ。さあ、――足並を揃へて出かけようぢやないか。逃げる男と逃げられる男と、この影法師を見たまへ。よく足並が揃ふぢやないか。そこでだ。かういふ小説がある。海岸の避暑地で、家庭のおもしろくない男が、眠られぬ夜を一人でこつそり起きあがつて町へ出かける。月のいゝ晩で、どこかに起きてゐるカフエーは無いかと思つて探してゐると、旅の道連れだつた一人の男に出會ふ。その男も同じやうな事情で家をぬけ出してきたのだ。その氣持がおのづからのうちに二人の間に通ずる。……と、かういふ筋だつたと思ふ。つまり、君のやうな人間は小説の中にざらにあつたのだ。勿論、これは西洋の小説だがね。ところが僕等の小説は此處から始まるのだ。逃げた男と逃げられた男が山間ひの道を腕を組んで、足並を揃へて、かうオ一二、オ一二、と歩いてゆく。さあ、これからだ。これからどうなるのだ！」

佐野庸吉は眼がまはつて、昏倒しさうになつた。あまり強く歩き過ぎたからだ。

やつとこさでつり橋をわたると木かげの暗い坂道になる。坂の下が村の共同風呂で、共同風呂の横が

馬の風呂だ。

「さあ、――今夜の筋書の首途に一風呂浴びてゆかう。」

小説家が先きに立つて石段をおりた。夜が更けて、風呂の中はしんとしてゐる。小説家が眞裸體になつて湯槽の中にとびこむと、やつと彼の腕から解放された佐野庸吉はそのまゝ石段の下で着物をぬいだが、よろよろと足を踏みはづすと見る間もなく、石疊を斜にすべつて共同風呂と反對側の暗い小屋の入口にいやといふほど肩をぶつゝけた。そのとき闇の中から異樣な怪物がぬつと首をつき出した。闇の中からぎよろりと光つて大きな眼玉は、全くそれが馬であるよりはほかの何ものでもない。……

小説家は湯槽のふちに長々と寢てしまつたが、さて二三分も眠つたと思ふ頃異樣な物音に眼を醒ました。彼はたしかに馬の叫び聲を聞いたのである。それから頭の上のつり橋の上を朗かに高鳴る蹄の音を。

小説家は慌てゝ川ぶちへとび出した。仄白い月光を浴びて、裸馬にまたがつたわが佐野庸吉が眞裸體のまゝ傲然とそり返つて、頭の上のつり橋を烈しく搖すぶりながらわたつてゆくではないか。――

これはあり得べからざることだ、と彼は思つた。彼の空想の中に現はれた佐野庸吉は何時の間にか空想をぬけ出したのである。そこで、彼は新しい構想を追ふために彼自身もまた眞裸體のまゝで石段をのぼつていつた。

明暗の記

神戸に近づいたころ、私は汽車の動搖で眼を醒ました。二時間ほど眠つたらしい。前の晩、門司の宿で、支那へ發つ友と徹宵して語り明かした疲れが、汽車に乘ると一時に出てきたのだ。――朝霧をやぶつて次第に遠ざかつてゆくY丸の甲板の上に帽子を振りながら立つてゐる友人の姿を靜かな幻想の中にさぐりながら、私は車窓にうつる明るい內海の風景をおぼろげに感じてゐたのである。だが眼が醒めると車室の中が妙にうす暗く、曇つた窓を透して低くたれ下つた空が近づいてゐた。汽車は起伏の多い丘にとりかこまれた寂しい平原を走つてゐるのである。黑い森をうしろにして藁葺の家の點在する小さい村落が見えた。時計を見ると未だ十二時を少し過ぎたばかりなのに、私の視野をうづめる雨氣を含んだ風景のためにたそがれの靜けさの中にゐるやうな氣になる。

斜め向ひのベンチにゐる大學生の横には何時の間にか一人の女學生が腰かけてゐるのだ。この女學生は廣島の一つ手前の驛から乘つたのだから――それは私がちやうど眠りかけたときだつた――下關から

私と一緒に乘り合はしてきたこの大學生と知り合ひである筈がない。それに私が眠る前には彼女はたしかに大學生のうしろのベンチに彼と背を向き合せて腰かけてゐたのだから。

二人が低い聲で話し合つてゐる。話かけてゐるのは大學生の方だけではあるが……女學生は兩手をきちんと膝の上に置いて絶えず何ものかを憚るものゝやうに、つゝましやかにうなづいてゐる。紫地の大きい矢絣の着物が線のはつきりした彼女の顏をあざやかにうき出してゐるので、首が前後にうごくごとに赤い大きな唇がかすかに顫へてゐるのが見える。私はかういふ情景の中一つの小さな運命を感じた。私は彼等を結びつける動機となつたものが、今大學生の前のベンチに彼と膝を突き合はして腰かけてゐる、丸々とふとつた赭ら顏の少年であることを思つた。すると、眼の前に現はれつゝある大きな變化が私の心に強い印象を與へたのだ、何故かといつて、頰骨が尖つて、皮膚の色がうす黑く濁り、眼がしよぼしよぼとうるんで見える大學生の姿は、私の浪漫的な空想の中に誘ひこむためにはあまりにみすぼらしすぎるし、それにこの女學生ば——彼女もまた「醜い林檎」の芳醇な味を知るためにはあまりに若すぎるではないか。それだけにこの運命には十分突發的な變化が期待されるのだから。そこで私は刻々にうごいてゆく窓外の風色に微笑をうかべながら、積木細工のやうに勝手に重ねあげた小說のプロットを幾度となく頭の中で解きほぐした。

だが、大學生にとつては、彼の望んでゐる運命の發展に一つの障碍物があつた。それは彼の前に腰か

けてゐる一人の少年である。何よりも大學生は、赤い頰をしたこの少年の聰明な眼をおそれなければならない。何故かといつて、この少年と大學生とは全く思ひがけない偶然によつて結びつけられてゐるからである。

私は下關驛のプラットフォームで、この少年とならんで忙しさうに歩いてゐる一人の老人を見た。盛裝した多くの旅行者たちの間に外套も着ないで、黑い、すりきれた襟卷をぐる〳〵と首に卷きつけた老人の姿は、朝が早いだけに一層みすぼらしかつた。彼が絕えず水洟をすゝつてゐたので、私はこの老人が風邪をひいてゐることを感じた。しかし、數分の後、私は、私の立つてゐるところから二三間先の大時計のかゝつた柱の下で、老人が一人の大學生と向ひ合つて丁寧に帽子をとりながら何事かを話してゐるのを見た。私がその方へ近づいていつたとき、大學生の低い聲が聞えた。

「えゝ、いゝですとも——驛までどなたか迎ひにいらつしやるんですか？」

「たしかまゐるとは思ひますが。」

その言葉で、すべてがわかつた。彼は始めて長い旅に出かける自分の子供を託すべき人を同じ汽車を待つてゐる群集の中から探し求めてゐたのである。しかし、垢でよれ〳〵になつたレーンコートを羽織つた謹嚴らしい大學生は彼が負はされた一つの責任に對してかすかな誇りを感じてゐるかのやうであつた。だが、大學生は自分の好意を恥ぢてゐるにちがひない。彼はすくなからず苛々してゐるやうに見える。

少年は眼をとぢて眠るやうな恰好をしてゐたがすぐに眼をあいた。同じことを幾度となく繰返してゐるのだ。私は彼の憂鬱を次第に自分の中に感じてきた。そのとき、女學生が急に立ちあがつて網棚の上から蜜柑の袋をおろし、そつと少年の膝の上に置いた。少年はそれを手にとつて、きまりわるさうにあたりを見廻してゐた。その表情は自分の置かれた立場の氣まづさをはつきり意識してゐるかのやうであつた。しかし、彼は蜜柑の袋を膝の上でいぢくつてゐるだけで決して喰べようとはしなかつた。

「さあ——君はこれをおよみなさい。」

急にひらき直つて少年の方を見た大學生がさう言つたやうな氣がした。それを彼の表情の中に感じたのだ。彼は少年の手に、一册の週刊雜誌をわたした。その態度は好意を示してゐるといふよりも、むしろ命令してゐるやうに見えた。

汽車の進行がのろくなり、神戸が眼の前に迫つてきたときには、しめやかな雨の雫が窓硝子の平面を傳つて流れ落ちた。空は愈々暗く、車室の中にならんでゐる人の顏がたよりなく見えた。私は襟足から忍びよつてくる寒さを外套でふせぎながら自分のベンチにごろりと横になつた。大學生が私の存在に少しづつ注意を拂ひはじめたのを感じたからだ。ときゞ彼は顏を上げて私の方を見た。さういふとき視線がぱつたり合ふと私は慌てゝそれを避けた。彼の瞳の中には他人の祕密を探り出さうとしてゐる卑しむべき人間に對する憤りが燃えてゐる。——その苛立たしい勇氣に充ちた視線は、彼が一つの幸福に

とり縋らうとしてゐることを感ぜしめるに十分であつた。頬のこけた、唇にしまりのない、萎びた老人のやうな彼の顏を前にしてゐると、私は彼の運命に祝福を與へなければ居られない氣持がしてきたのだ。そこで、私は自分がこの小さな變化に全く無關心であることを示すために自分のベンチにごろりと横になつた。背を彼の方に向けながら。

神戸を過ぎ大阪へ着くと、乘客の顏は大半新しくなつた。私の前のベンチで膝の上に謠曲の本をひろげ、退屈さうに腰を敲きながら、絶えず唇をとがらしてうなつてゐた四十前後の肥つた男が大阪で下りてしまふと、そのあとへ、いそ〳〵と一組の若い夫婦が乘りこんだ。洋服を着た會社員らしい男で、彼は土産物らしい荷物の包を一つ〳〵網棚の上に載せてしまふと、若い妻とならんで腰をかけた。

彼等が新婚の夫婦であることは一目でわかつた。低い聲で彼等はひそ〳〵と話し合つてゐた。小柄な田舍娘らしい女には丸髷がよく似合つた。

私はときゞ〳〵鼻先に漂つてくる新しい髮あぶらのにほひを嗅ながら、この二人の男女がまもり立てゝゐる小さな哀れな幸福を思つた。彼等は話が途切れると、無言のうちに顏を見合はせて笑つた。だが彼等は慌てゝ眼を外らし、男が次の話のいとぐちを見つけるまで、女は顏を俯せ、手を膝の上に組み合はせて待つてゐた。それはかすかな幸福の破片をすらも人に盜まれるのを恐れてゐるかのやうであつた。

そのとき、急にあかりがついた。そして愉快さうに笑ふ聲が聞えてきた。急にその方を向いたとき、

私は偶然一つの新しい場面を目撃した。天井のあかりのために、私はちやうど舞臺の新しい幕がひき上げられたやうな氣がしたのだ。大學生の前に、少年が腰かけてゐたベンチには何時の間にか少年とならんで鳥打帽をかぶつた商人らしい男が腰かけてゐる。そして、その男が左の手にさゝげた小さな箱に向つて三本の手が伸び、その指先には黄色い菓子が挾まれてゐた。賑かな笑ひ聲は其處から起つてくるのであつた。若し、私がこの商人と同じやうに大阪から乘合はした乘客であるとしたら、私はきつと、一人の大學生と彼の戀人と、そして、そのどちかの弟である一人の少年を見出したであらう。商人は彼等の關係に少しの疑ひを持つてゐないやうに見えた。少年の立場は忽ち變つた。商人が何事かを彼に向つて話しかけるごとに少年はうれしさうに微笑み、そして、大學生は愛情に充ちた笑ひを彼の顏の上に投げてゐた。彼は最早少年を彼の運命の障碍物にする必要がなくなつてしまつたのである。

私は幾度か眠り、幾度か眼醒め、汽車が大きな驛にとまるごとに、一家の團欒を思はせるやうな彼等の朗かな聲を聞いた。しかし、私が朝の冷氣を感じて最後の眠りから醒めたとき、そこには白々と冴えた空の明るみの中に丸くかゞんで眠つてゐる少年の姿だけが見えた。そして、彼等の空席には、女學生の羽織りが亂雜に投げ出された新聞紙の上にきちんと疊んで載せてあつた。私は顏を洗ひ、一人で朝の食堂車へはひつてゆくと、偶然にも私は斜め向ひの席に、大學生と女學生とが向ひ合つて珈琲をすゝつてゐるのを見た。大學生は私の顏を見ると、輝いた眼をあげて謹み深い微笑を投げた。

莊嚴な話

僕はこの話を何處から切り出していゝか見當がつかないのだ。かういふアパートがあつたといふことを話してゐると、僕はつい、うつかり住んでゐる人たちのことを忘れてしまふのだ。――だが、それだからといつて、此處でこんな事件が起つたといふ風にやりだすと、僕は最もかんじんな、アパートの性質についてまるで何も話せないことになるにきまつてゐる。此處にはたくさんの人が住んでゐて、實際、その一人々々について途方もない事件が矢繼早に起つてゐるのだ。そして、そんなことは僕にはまるで興味が無いのだ。これはたしかに妙な話だ。そこで、僕が君たちに理解してもらひたいと思ふことは、僕の話が、僕の話さうとしてゐることよりも、まつたく別のところにあるといふことだ。これは僕に言葉が足りないせゐではない。言葉が幾つあつても足りないのだ。例へば、――このアパートの一番下の部屋に一人の老人が住んでゐる。僕はこの老人の話をするのだが、しかし、僕が話さうと思つてゐることはこの老人のことではないのだ。この老人のゐる部屋のすぐ隣に若い夫婦が住んでゐる。それから、正面の階段をのぼつて、とつつきの部屋に一人のコンミュニストが住んでゐる。――だが、こんな風に

話していつたらきりがない。だから、僕は勝手にしやべりちらすことにする。このアパートは丘の上に建つてゐる。いや、海岸でも街の中でもいゝ、兎に角こんなアパートがあつた。これは入口もなく裏口もなく、從つてすべてが入口であり裏口であつて、――だから、誰も彼も、あいてゐる窓から、何處へだつてはひつてゆける。そして、實際、窓が多すぎる。窓が多すぎるといふことは事件が多すぎるといふことを意味するのだ。そこで、僕はいよいよ老人の話をする。――その老人は窓がおそろしくつて仕方がないのだ。この老人は終日、ベットの中で眠つてゐる。窓のカーテンはとぢて置かねばならない。窓があいてゐると、誰かゞきつとやつてくる。そして、青い空が見える。高い灌木の梢が見える。それが彼の心を苛々させるのだ。彼はうす暗い部屋の中で。毎日同じやうな空想をつゞける。彼の半生の記憶は、まるで、古さびた枕草紙の假名文字をたどるやうにべつたりと血の氣を失つた彼の肌に吸ひついてくる。彼の頭の中で一臺のガタ馬車がゆれてゐる。猥談のやうに曲りくねつた山道だ。その曲り角で馬車が烈しくゆれる。すると、中にゐたセムシの青年が巡禮の娘の腰に抱きついた。だが、これは少しも不思議なことではない。壁一重の隣りには若い夫婦が住んでゐて、そして壁さへぶつこぬいてしまへば、老人は何時だつて、ベットの上に抱きあつてゐる二人の姿を見ることが出來るのだ。そして、老人はときどき、若い女のすゝり泣く聲を聞く。ことわつておくが、この老人はつんぼだから彼の耳にこの人生の物音が何一つだつて聞える筈はないのだが――いや、それだから一層はつきり聞えるといふこと

は誰にだつてわかるだらう。かういふ場合に起る奇怪な現象が一つの錯覺として片づけてしまふことができるだらうか。例へば、一臺の飛行機が空をすべつてゆく。カーテンのすき間から老人は空を横切つてゆく豪快な「性慾」を見る。そこで彼の眼に映じたのは飛行機ではなくて「一つの性慾」であつたとしても……。

ところで、彼の隣りの部屋では、若い夫婦が「わかれ話」の相談をしてゐるのだ。男の方は小説家で、彼のテーブルの上には書きかけの原稿用紙が置いてある。彼は隣りの部屋にゐる老人のことを書いてゐるのだ。「――この老人はすつかり年をとつてしまつてゐるので、窓をあけてすがすがしい空氣に觸れることが必要だ、たが、しかし、彼にはそれができなかつた。彼は何よりも彼の清澄な心が雜音によつて亂されることをおそれるからである。何よりも隣りの部屋にゐる夫婦のざわめきが、彼の過去の遠い記憶の中からひゞいてくる……」

その若い夫婦は、しかし、その次の朝引つ越していつた。そのあとへ誰かゞ引つ越してきた。誰だつて構ふものか。一つの空席がみたされたといふより以上の何事も起り得る筈がないのだ。老人はある夜二階の窓から流れてくる燈火に心をひかれた。彼はそつと窓に忍びよつてカーテンをあけた。そこには彼の過去がおどろくべき生彩をもつて輝いてゐた。最初彼の眼にうつつたのは、二階の部屋の、白い壁の上にかゝつてゐる額にはひつた一枚の春畫であつた。そしてその下で二人の男女が組打ちをしてゐた。

黑い人影が入り亂れた。それは一瞬間だつた。すぐひつそりとなつてしまつた。老人は虚ろな瞳を空へ向けた。

二階の部屋にゐる若いコンミュニストはその夜のうちに拘引されていつた。亂鬪のあとで、部屋の中には、テーブルや、椅子や、灰皿や、書物が亂雜に散らばつてゐる床の上を、正面の壁にかゝつたレーニンの畫像がぢつと見おろしてゐた。——

僕は少し老人のことを話しすぎたやうだ。それで僕の言はうとしてゐることはまるで方角ちがひになつてしまつた。僕の話さうとしてゐることはこんなことではない。僕はこの老人が何ものであるかといふことを、——そして、現實の上にあらはれた錯覺が、いかにわれわれの空想の中に正しい位置を保つてゐるかといふことを話したかつたのだが、……

町會議員

町會議員の選擧がはじまつた。

商家の店先や道の曲り角をふさぐ立看板が一つ一つふえてきた。西方現助の住んでゐる郊外のNに名乘りをあげたのが土地の大地主である「大見幸兵衞」——である。（彼の所有する土地はこの村の三分の一を占めてゐると言はれる北部の丘陵の大半にわたつてゐる）——だから、いふまでもなく、現助の家もまた彼の所有なのである。

それから、續々と現はれてきた。酒屋の親爺である「杉浦太一郎」。それから、土地會社と地主とを結託させたことにおいてこの村の繁榮につくしたと言はれる（そして、事實、彼の配つた「政見發表書」にはさう書いてある！）辯護士の「猪原鹿雄」米屋の親爺で、カフエーの經營者で、昔、小學校長を勤めたことのある「安藤與左五郎」等、等、等——

選擧戰が白熱化してきた。

日本××黨の××支部では、だから候補者の選定で忙しかつた。特にN町一帶は、有名な無産黨代議士である鵜月進平の地盤ではないか。そこで、厭が應でも無産派の議員を一人立てる必要があつた。

「西方現助は如何だ！」

と、ある若い黨員が、さう叫んだとき、最初にテーブルを敲いたのは鵜月進平だつた。

「賛成だ！　西方のゐるのを忘れてゐた、あの男なら、十年前の僕の同志（同志といふ言葉は必ずしも革命運動の同志といふだけの意味ではない。何故かといつて、彼等は十年前において、まことに同志だつたから、下宿屋を踏み倒すことにおいて、酒場の女を手に入れることにおいて、そしてそれぞれが、今日、作者すらも説明することのできないやうな一つの行爲の後始末をつけるために一致協同の動作をとつた點において、――）だ！　それに雄辯家だし、先づ貫録から言つても、名聲（名聲とは政治欄の論説から文藝欄のゴシツプまでを含む）から言つても町會議員としては……」

まことに、町會議員には町會議員に相應はしい名聲があるのである。彼、西方現助を指名した若い黨員が、そこで、深夜の村道を自轉車を飛ばして駈けつけた！

さて、西方現助なのである。彼はその夜、女をつれて、郊外の驛から海岸へつゞく細い道を線路傳ひに歩いてゐた。

大通りを歩くと知つた顔にぶつかるおそれがあるし、それに自動車に乘るほどの持合せがない。それにもかゝはらず、彼は今から泊るための宿屋を探さなければならないのである。海岸には朝から晩まで蒲團の敷いてある小さな座敷をたくさんに持つてゐて、女さへつれてゆけばどんな男でも必ず泊めてくれる宿屋がならんでゐる。

これは仕方のないことである。（誰にしたつてさうである。まつたく、せつぱつまつたときには仕方がないものなのである。）

それほど彼の狀態はせつぱつまつてゐた。これも彼にかぎつたことではない。（せつぱつまるのは必ずしも好色な人情主義者だけではないからである。）

ところで、――二人の關係は次の會話が説明するであらう。

「ねえ、――わたしはこれから一體如何なるの？」

「そんなことを言つたつて、今のおれに……？」

「ぢやあ、わかれるのね、そして、元の家へ歸るのね、あなたほもうわたしのことなんぞ考へてくれないんだわ、わたしもう明日からどんな女になるかわからないことよ、でもその方がよつぽどいゝわ、こんな風にずるずるに引つぱられてゐるよりは……」

この位にして置かう。（どうも、わたしはかういふ會話を書くのがうまくない。）

だから、西方現助はすつかりまゐつてしまつてゐた。（かういふ狀態に入つてくると何も彼もが一つの結末に近づいてくるやうに見えるものなのである。）

惡いときには惡いことが起るものだ。二人が一つの露地へ曲らうとしたときである。サーベルを鳴らしながらやつてきた男にぶつかつた。

暗闇の中でその男は鋭い眼つきで西方現助の風體を見た。誰だつてこんな場所で彼の風體を見たら立ちどまるであらう。彼は一組しかない着物を二日前に質へ入れたばかりなのである。だから、彼よりもずつと丈の低い友人の着物を借りて着てゐた。だから、裾が短くて仕方がない。それを掩ひかくすために古い袷袍を羽織つてゐる。見たまへ、――帽子もかむらないで、月光に乾いた道を足駄をはいてせかせかと歩いてゐる男のあとから十八九に見える若い女が眼を泣きはらしながらついてくるのである。だから、サーベルをぶらさげた男が見逃すわけがない。

西方現助の昔の家（といふ意味は、彼と彼の妻とは半歳前にわかれてしまつたので、二人は別々の家に暮してゐるのである。）には、その夜、工手學校へ通つてゐる青年（その男が家政婦の代りをやつてゐる。）と、それから彼の後輩である足助桁吉がゐた。（――この男はまた逆に、下宿屋の督促が烈しいので、今書いてゐる「人情講談」が金になるまで西方現助の家に轉がりこんでゐるのである。）

そこへ、××黨の使命を帶びた若い黨員がやつてきた。

西方がゐないことを知ると、若い黨員はすつかり氣拔けがしてしまつた。

「ぢやあ、明日の朝の十時までに來ますからね、必ず待つてゐてくれるやうに言つて下さいよ。」

「それがね、僕も實は留守番を頼まれてゐるわけぢやないんで、――だから、よくわからないんだが、何しろ一度出かけたら何時になつて歸つてくるのかまるでわからない人なんで……」

「だつて、此處は西方さんの家なんでせう、せめて奥さんにでも會ひたいんだがなあ――？」

「それがね、この家には奥さんも誰もゐないんですよ、僕も實はよくわからないんだが……」

いや、まつたく、かうなつてくると作者にもよくわからないのである。だから、況んや足助桁吉が、夜、自轉車でやつてくる男（かういふ男は）電報配達か、それでなければ他人の祕密をあばいて飯を喰つてゐる怪しげな職業の男にちがひない！　に對して言葉を濁すのは當然であらう。

「ぢやあ。」

と、若い黨員が言つた。――「要件だけ話して置きますからね、實は今度の町會の選擧で、是非共無產黨で西方さんを擔がうといふことになつたんだが、時日が切迫してゐるし、困るなあ、何處か心當りはないですかね。」

「ほう、それは。」

と、そのとき、桁吉の表情が一變したことはいふまでもない。

――「兎に角、上つてお茶でも飲んでいらつしやい！」

「それで如何でせうかね、西方さんは承知しさうですかね。」

「いや、すくなくとも僕は大賛成ですがね。」

しかし、さうは言つても困るのは西方のゐる場所なのである。（それほど、彼は轉々として暮してゐるので何處にゐるのかまるで見當がつかない）――しかし、それはさうとしても、この突拍子もない事件のために桁吉の煩悶（つまり何時下宿屋へ歸れるかといふことについての）は消え失せた。

何しろ、桁吉にとつては西方現助よりも彼自身のことの方が問題なのである。といふのは彼は最近結婚しようと思つてゐるのであるが（そして正式に――まことに彼は正式を尊ぶ男なのである――愛人の父親との交渉もすんでいよいよ一家を構へるといふことになつてゐるのであるが）――かういふ非常の場合にこんなところに轉がりこんでゐなければならないといふことは何といふ不幸であらうか。そこで、彼が何か一つの事件を探し求めることは當然である。（事件ともいふものはすべて、かういふ境遇の人間にとつて氣晴らしになるものである。例へば、何處かの貞淑な細君が姦通をしたとか、失戀したモダン・ボーイが自殺したとか、大地震があつて市街が滅茶目茶になつたとか、動物園の熊が逃げ出したとか…）

彼は非常に自分の身邊が忙しくなつてきたやうな氣がしてきた。そこでしきりに貧乏ゆすりをつゞけ

ながら（それが彼の癖なのである）若い黨員の言葉に耳を傾けた。

若い黨員は、自分の話の進むにつれて烈しく身體をゆすぶりだした男を見ると、この男が非常に昂奮してゐることを感じた。

「――今までに三十五人候補者が出てゐますからね、先づ全部で四十人としても、鵜月進平氏の手でまとめ得る投票が六十票はある。それに散票が二三十票はあると見て、かなりな高點で當選することは請合ひです。それに應援辯士はこつちからいくらでも派遣するし……」

「いや、辯士ならこつちにだつて、いくらでもありますからね。」

と、桁吉が勢ひこんで言つた。彼は自分が黑い背廣服を着て（演說よりも、彼はもう一年あまり質屋の倉庫の中でカビの生えてゐるその洋服をおもひだすと思はず暗然とした）――いや、しかし一瞬間彼の眼界をふさいだ群集の歡呼の聲がすぐに彼の憂鬱を吹き消した。彼は演壇に立つてゐる自分の姿を想像したのである。すると少しづつ氣持に彈みがついてきた。群集の顏、帽子の波、おゝその中から、自分の聲のリズムに聽き惚れてゐるうつとりと輝いた愛人の瞳。

「ぢやあ、兎に角、無駄足を踏んでも明日來てみますからね。」

「――僕も心あたりを探して見ませう、きつと大丈夫ですよ。」

探さなくつても、彼はことによるともう今夜あたり西方現助が歸つてくるにちがひないことを知つて

ゐる。（――金を費ひ果して行き場所がなくなると、あの男はきつと歸つてくるからである、それに第一、あんな風體で長い間ふらついて居られる筈のものではない。

若い黨員が歸つてゆくと、桁吉は急に大聲で笑ひだした。

誰だつて笑ふであらう。あんなぐうたらな小説家が町會議員になる。（考へてもみるがいゝ、町會議員といふものは町の政情に通じてゐて、道路の心配をしたり、衞生の心配をしたり、それから町民の世話をやいたり、場合によれば土地會社と地主との結託に力を添へるために小まめに駈けずり廻るものなのである。）

ところが如何です、――西方現助は？　彼はこの一年近く、家並のつゞいてゐる大通りを歩いたことがないのである。道の要所要所は彼の債權者が見張りをしてゐる。その警戒をすりぬけるために彼は何時も裏道づたひに歩いてゐる男なのである。こんな場所で、こんな狀態の下で西方現助が町會議員の候補者になる。――すべて人生を正式に考へようとする桁吉の頭の中に西方現助のカリカチュアが幾つとなく描き出されたことは申すまでもない。すると、彼の心にはますます彈みがついてきた。

だが、しかし、誰よりも、この事件を喜んだのは工手學校へ通つてゐる青年だつた。彼は毎日のやうに押しかけてくる「借金とり」への言ひわけにすつかりまゐつてしまつてゐた。それに何よりも、かういふあやふやな家庭の中にゐては何時如何なるかわかつたものではない。（彼はまるで船に乘つてゐるや

うな氣がするのである。九州の漁村で育つた彼は板子一枚下が地獄であることを知つてゐる、おお、それにしても何とこの生活の一枚下が地獄であることよ！）

しかし、これからはさうでない。わが西方現助は大地主の大見幸兵衞を向うへ廻して戰ふのではないか。――借金とりなんか糞喰らへだ。そこで、彼は身にあまる光榮を感じた。何故かといつて彼は九州の片田舎から「出世」を目がけて上京してきた若者なのである。そして、見ろ、出世のいとぐちといふものはすべて、かういふ風に偶然の機會からひらけるものだ。だから彼は地主の政黨よりも無産黨の方が好きなのである。地主たちの出世は、もうすつかり行詰つてしまつてゐるが、無産黨員はこれからどの位出世するか知れないのだ！

さて、その翌日だつた。約束どほり、若い黨員は午前十時にやつてきた。西方現助がゐないので彼はすつかり力を落してしまつた。

「今夜まで待つてくれたまへ、僕がきつと探しだしてくるから。」

と足助桁吉は自信にみちた聲で言つた。――「必ず、僕が責任を負ふからね。」

「ぢやあ、明日、もう一度來てみますよ、何しろ時日が切迫してゐますからね。」

切迫してゐるのは町會議員の選擧だけではなかつた。彼の眼の前には、あらゆるものが切迫してゐた。例へば下宿屋の勘定も、結婚も、それから書きかけの「人情講談」も……

だから、桁吉は西方現助の友人の家を歩き廻つた。それから自腹をきつて、彼の行きさうな場所へ電話をかけてみた。何處にも西方現助はゐなかつた。だから、彼はへとへとに疲れてしまつたのである。眼がしらがぼうつとなつて、それから涙がにぢんできた。人間は非常に疲れると思ひがけなくセンチメンタルになる瞬間があるものである。

そこで桁吉は停車場に近い小さなカフエーの扉をあけた。

すると、

「おおい、桁吉！」

さう言つて立ちあがつた一つの顔がある。褞袍を着て、足駄をはいた、——まぎれもなく西方現助なのである。

一時を過ぎた夜の路上に、もつれあつた酔漢の影がうかびあがつた。

「こんなに酔つぱらつちゃ仕方がないな、あしたは大事な用事があるんですよ。」

「——大事な用事が。」

西方現助はペッと唾液を吐いた。——「大事な用事なんかザラにあるぢやないか、おれは今考へてゐるんだ、町會議員にならうかそれとも駈落をしようか。」

「駈落は古いですよ。」

「さうだ、——してみると町會議員の方が新しいかな、ぢやあれは今夜、政見發表をやらう。」

月夜の道が西方の眼の前で大きく波をうちはじめたのである。桁吉こそいゝ面の皮である。（こんな男にくつゝいて歩いてゐるから彼は「人情講談」しか書けないのである。）

西方現助は桁吉の肩にもたれて歩いてゐた。彼等が、西方の家へ曲る露地の入口まで來たときだつた。西方現助の耳の底に悠揚として、（まことに彼の頭の中を人生が悠揚として流れてゐた）——これはまた何事だ。フオックス・トロットの奏樂が夜の闇をかすめてひゞいてきた。

彼の家には電燈が明るく窓のカーテンに沁みてゐる。

「おや、おや——」

彼は倒れるやうに垣根によりかゝつた。うすいレースのカーテンをとほして（まつたく彼はこのやうに明るく輝いた窓を見たことがない）一團の人間の姿が影繪のやうに流れてゐるではないか。

ときどき拍手が起つた。（西方現助はまつたく呆然としてしまつた。）

曲目は幾度となく變つた。そして變るごとに一對の男女が、リノリウムの上を輕くすべつていつた。

「おれはまるで頭がへんになつてしまつたぞ！」

彼は口をあけて呆然として立つてゐる桁吉をかりみた。

「――おゝ、ワン・ワン・ブリューズだ！」と、桁吉が低い聲で言つた。

そのとき、横の窓の一つがあいて、うすいカーテンが風に煽られてゐた。ゐる、ゐる。詩人の安木千間がゐる、丘の上に宏壯な邸宅をもつてゐる石炭會社の社長夫人がゐる。それから、彼の昔の妻が……（斷髪が風のためにふくれかへつて桶をのせた飴賣の頭のやうに平べつたくなつてゐる！）――A・N劇場の早川計六がある。（あいつはまるでさかりのついた犬だ！）

一つの流れをつくつて、ぐるぐる廻つてゐる。顏、顏、顏、顏、顏の渦。

西方は何時の間にか垣根にもたれかゝつて調子をとつてゐた。彼の眼の前ではあらゆるものが動きだした。――誰か逆立ちをしてゐるではないか。逆立ちをして尻を動かしてゐる幾組かの男女。異樣な姿をしてゐる誰も彼もがどつと窓の外にあふれだした。一團の行列が彼の眼の前を通つてゆくのである。月光の中を幽靈のやうにみんな長い舌をぺろりと出して前屈みになつて歩いてゆく。――「桁吉、さあ行かう！」

彼は白い砂利道の上を正面の丘に向つて駈けだした。大根畑が彼の眼の前に長い傾斜を描いてゆれてゐた。街道をはさんでならんでゐる文化住宅がぢりぢりと彼の方に近づいてきた。（桁吉が彼を追つかけたときには西方現助はもはや丘陵の上に立ちあがつて、大きなゼスチュアをつかひながらしやべりはじ

めたではないか！）

その姿が薄明の空の下にうかびあがつたとき桁吉は思はず兩手を胸の上で組み合せた。（彼は昔、神學校の生徒だつたときのことをおもひだしたのである。）

――「諸君、わたくしは今夕。」

西方現助は、彼の前にあふれてくる人生の聽衆に向つてかう叫びかけた。

「――甚だ愉快であります、町會議員の候補者として一席の演說を試みる事は一生の光榮であります。」（彼の足下では雜木の枝が風に動いてヒヤヒヤといふ聲が聞えた。）

「さて。」

彼は褞袍の兩襟をつかんで、左足を一歩前へ突き出した。そのとき、丘を一つ越えた窪地の隅にある風呂屋の煙突からひとすぢの煙が空を横切つて流れていつた。――おゝ、あの煙だ、と彼は思つた。

「諸君、見給へ、あの煙を、――あの煙には諸君が忘るゝ能はざる哀別離苦の思ひが疊みこまれてゐるのであります。わたくしはこの陵丘に立つて、あの煙突から吐き出される煙を眺めるごとに、夜更けて、この街道を霜を踏みつゝ落ち延びていつた高原芥子太郎君の姿をおもひうかべるのであります。高原君の姿こそは正しくこの町に跋扈する地主階級の壓迫の犧牲となつて倒れた哀れな民衆の最期を語るものであります。彼の運命はことごとく諸君の運命である。わたくしが始めてこの町に移り住んだとき、こ

の荒涼たる平原の一覽に、全財産を抛つて、風呂屋を建てたのは高原芥子太郎君であります。諸君は芥子太郎君がいかに生活と戰ひ、生活に疲れ、生活に組み伏せられてしまつたかといふことをお考へになつたことがありますか。

嚴寒の一夜、わたしは彼――高原芥子太郎君が道ばたに古材木を積み、シャツ一枚になつて大きな『マサカリ』を振りあげてゐる姿を見たことがある。そのとき『マサカリ』は彼の姿より大きく見えた。あの小さな男が汗みどろになつて、材木にとびかゝつてゆく姿をわしは今でもおもひだすことができるのであります。諸君、――（西方現助はもう一歩前へ進み出した）――何がために彼は深更、霜を踏んで『マサカリ』を振りあげなければならなかつたか。彼の石炭小屋には今や焚くべき一粒の石炭も殘つてはゐないからであります。この悲境の中にあつて彼の妻は二人の子供を置いて、道路人夫の一人と何處かへ駈落をしてしまつたのであります。（――彼の頭の中には高原芥子太郎の顏が現れてきた「嘘をつけ！」さう言つて怒氣をふくんだ瞳が彼の心に迫つてくるのである。）

諸君は、あの風呂屋の番臺の上に子供をあやしながら坐つてゐた蒼ぶくれの女房の顏をおもひ出すことが出來るであらう。あの善良な女が、生活の艱苦に堪ふる能はずして、唯一つの血路を駈落に求めたといふことが善いか惡いか……いやそんなことが問題ではないのである。高原芥子太郎君はそれほど困窮のドン底をのたうち廻らねばならなかつたのである。おゝ、高原芥子太郎君、――戰ひ疲れた彼は到

頭この町を落ち延びて何處へか姿を隱してしまつたのである。見給へ、夜空の中に月光を浴びて煙突の黑いペンキの色は未だ新しく輝いてゐるではないか。あのペンキの色こそは彼の最後の努力を語るものである。彼は煙突を新しく塗り替へたが生活を塗り替へることができなかつた。それから、數日の後、雨の夜道を、古い荷車に、家財道具と子供を積んで逃げ落ちてしまつたのである。おゝ、あの砂利を敷いた街道筋に鳴る彼の荷車の轍の音を聞け、――（彼の足元で拍手が涙のやうに起つたやうな氣がした）

さて、諸君、（――彼は街道を挾む町並の家から洩れてくる燈火が烈しくゆらぎはじめたのを感じた。彼はその一軒一軒を知つてゐた。はづれにあるのが魚屋で、その次が雷燈屋で、その次が古本屋で、その次がおでん屋で……おゝ、そのことごとくが何と彼の債權者ばかりではないか！）――然らば、高原芥子太郎君は何故にかゝる悲境に陷らなければならなつたのか。彼は地主階級の壓迫の犧牲となつて倒れたのである。あの森の向うに白いコンクリートの煙突が見えるではないか。あの煙突は芥子太郎の生活を奪ふためにつくられた地主の大山幸太郎のつくつた風呂屋である。あの風呂屋のために芥子太郎の浴客は大半を奪はれたのである。それだけではない。土地會社と結託して陋劣なる町會議員を買收した大山幸太郎及びその一黨は芥子太郎の地代が一ケ年停滯してゐるといふ理由だけで、……（――此處までしやべつてきたとき、彼は急に言葉が詰まつてしまつた――「町會議員」はもうやめだ！――そのとき遠くから牛の鳴き聲がひゞいてきた。すると西方現助はこの勇敢な野次に對抗するためにもう一度、力

一ばい胸を張つた）――おゝ、諸君、諸君は一體、僕の演說を聽いてゐるのかゐないのか。どの家もまるで戸をとぢて寢靜まつてしまつてゐるぢやないか。一體何のために戸をとぢ、窓をしめ、それから、カーテンをおろしてしまつてゐるのか、滑稽なる小動物よ、戸をとぢたら何者も襲來することが出來ないと信じてゐるのか。深夜、諸君を襲ふ者は强盜だけではないそ、錠をおろしたら諸君の妻と運命とを守り得ると思つたら大間違ひだぞ！」

――了――

定價五拾錢
郵送料六錢

悲劇を探す男

昭和五年五月六日印刷
昭和五年五月七日發行

著作者　尾崎士郎
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町

發行所　新潮社
電話牛込　長八〇五番　八〇六番　八〇七番　八〇八番　八〇九番
振替東京　一七四二番

東京小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

新興藝術派叢書

■物質の彈道（物質の彈道○三日間○惡戯○賭○茂次郎の話○銀杏の實○蟇口の話○鸚鵡の話○戀と逆上○鵜の巣○血○三月變○母）岡田三郎

■街のナンセンス（藝術を街頭へ○創作五篇○コント五篇○小品五篇○通俗小說五篇）龍膽寺雄

■聯想の暴風（月で鷄が釣れたら○薔薇の花のついた寢臺○北京の頃の娘○ザンバ○ある轉形期の勞働者○李大石○青龍旗（以下五篇）久野豐彦

■僕の標本室（叩く子○踊子旅風俗○盲目と少女○士族○○バッタと鈴蟲○母國語の祈禱○馬美人○○笑はぬ男○顯微鏡怪談（以下三十八篇）川端康成

■神聖な裸婦（明日へ游ぐ○襟・竹の花○神聖な裸婦○十七歳の感情○上層の風○白い水族館○ヅロオスを穿忘れたお孃さん（以下九篇）樹崎勤

■黑い地帶（黑い地帶○獵奇の街○鷲鳥○汽笛○都會の觸手○或る浮浪者○土龍○鄕愁○自殺）を奬める話○熊の出る開墾地○馘首）佐左木俊郎

■崖の下（業苦○崖の下○生別離○足相撲○曇り日○フヂ○一日○父となる日○あかご○牡丹雪○不幸な夫婦○戀文○父の手紙）嘉村礒多

■夜ふけと梅の花（朽助のゐる谷間○炭鑛地帶病院○山椒魚○ジョセフと女子大學生○埋愛記○休憩時間○鯉○夜ふけと梅の花（以下八篇）井伏鱒二

■女群行進（女群行進○風船玉とスプリングコート○不整形感情○重役Tの感傷○四年間○彼女の分裂○青きドナウ○風船（以下六篇）淺原六朗

——以下續々刊行・一冊五拾錢——

新興藝術派叢書

■高架線（高架線○鳥○笑つた皇后○靜かな羅列○負けた良人○古い筆○恐ろしき花）横光利一

■淡彩の處女（街頭の風○マタンの墜落○木馬の悲劇○雪崩○重い船脚○淡彩の處女○街を彩る女○永遠の請願）北村壽夫

■悲劇を探す男（悲劇を探す男○ある港にて○ピストル○犬と幻想○野良犬フリッツ○當世文人氣質○六助の逃亡○傳說（以下九篇）尾崎士郎

■豹の部屋（ビル○エスコート○豹の部屋○洗濯女の安否○春淺く○ふもとの諦め○夏と鞄○とまやの精進○讃の味（以下十篇）ささきふさ

■R汽船の壯圖（肉體の暴風○ブルカマル○博齒になる馬車○赤と白○男爵未亡人○夢とある夫婦○R汽船の壯圖○蘇州の旅（以下七篇）中河與一

■戀とアフリカ（日本のじぶしい○シネマの黑人○美しい跛足の女○椅子○戀人○森林○日獨對抗競技○戀とアフリカ（以下六篇）阿部知二

■ボア吉の求婚（長靴をはいた猫○ボア吉の求婚○コスモス女學校○ポンチの月○赤蟻○三度夫人の別れの日○青葉夫人の指環（以下七篇）中村正常

近刊 女百貨店（孟買挿話○自由港の女○大總統戴冠式○地圖に出てくる男女○張作霖の死ぬ迄○女百貨店○喇嘛寺附近（以下十二篇）吉行エイスケ

近刊 愛慾の一匙（運動場とばらのいあ○魑魅○夜のさん・るむ○しなびた葉つば○骸○硝子管の家○鉛色のペチカ○創○白い腕）舟橋聖一

キャベツの倫理——近刊——十一谷義三郎

——以下續々刊行・一冊五拾錢——

603
113

中河與一氏著（佐伯祐三氏デツサン裝幀）增版出來!!

形式主義藝術論

四六判二百八十頁
定價壹圓七拾錢
郵送料拾錢

著者疾呼して曰く、從來のプルジョア文學論、殊にプロレタリア文學論に飽きたらぬ者は須らく來つて此の新理論に就けと。

形式主義藝術論は、昨年の文壇に大なる衝動を與へた題目であつた。併し、これは決して年度的に終始するやうな一時的の問題ではなく、こゝに新時代の新美學の出發があるといふ見地から、中河氏は奮然として此の一著を公にされたのである。この一卷を草するにあたつて、著者は數ヶ月間机に向つたまゝ一瞬の休息をさへ惜んだと云はれる。いかにそれが天來的な情熱によつて書かれたものかを知る可きであらう。見よ！　過去一切の文學論は、この新理論によつて根柢から訂正せられねばならぬ。この明快にして强力なる科學的新美學說の上に立脚しない限り、一切は無意味であらうとは、著者の揚言するところだ。實に著者が心血をかたむけ盡して編みなした劃期的の一大評論である。

尖端的機械その他の寫眞十六枚を別刷り口繪として掲ぐ。

603
113

603
113

新潮社發行

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black